

# 小学校・中学校における戦争体験・ 戦後体験についての聞き取り調査の研究

神山 知徳 (昭和学院中学・高等学校)

## はじめに

筆者が教員になって20年になるが、その間に大小3次にわたる学習指導要領の改訂があり、一貫して基礎的な知識や技能の習得と思考力、判断力、表現力の育成が強調されてきた。『中学校学習指導要領解説 社会編』(2008年)では、その改訂の趣旨をこう述べている。この思考力・判断力・表現力等を確実に育むため、言語活動の充実を図り、社会参画に関する学習を重視することが必要であると。

また新たに歴史的分野に25時間増やされ、中3で40時間も歴史を学習することになった。そこには明らかな現代史重視の方向を見て取れる。そのため筆者は、より効果的な現代史学習の方法として、2001年度から祖父母への聞き取り調査を軸に据えた学習指導を実践している。その高い学習効果については、拙稿「歴史学習における戦争体験・戦後体験の聞き取り調査・レポート作成の授業実践と効果」<sup>(1)</sup>に詳しい。特にここ数年は、経験年数の浅い若手教員と一緒に授業を担当することが多くなり、この実践が教員としてのキャリアの有無を問わないものであることを実証することができた。

ところが生徒へのアンケートを行ってみると、このような実践が小学校では比較的広く行われているにもかかわらず、中学校以上では、管見の限りほとんど実践例が見当たらない<sup>(2)</sup>。そこで最終的には、これほど効果的な学習スタイルがなぜ中学校以上の学校では実践されにくいのか、どうすればそれが実践されやすい環境を整えることが出来るのかを考えてみたい。

そのために、まずは小学校でどのような実践が行われているか、その実践例を調査・紹介し、そしていずれは、小学校・中学校それぞれの発達段階に沿った形での実践の提言が出来ればと思う。

## 聞き取り調査を用いた実践の概況

東京大空襲の被災地でもあり、戦争学習の一環として聞き取り調査をしているケースが多いのではないかという見通しから、2012年2月から3月にかけて、墨田区・台東区および本校所在地である市川市の2区1市の公立小学校108校を対象に、郵送方式でアンケートを行った。回答数はわずか13校で、回収率は12.0%にとどまったが、その半数以上に当たる9校が聞き取り調査の経験があると答えている<sup>(3)</sup>。

郵送アンケートによる調査であるから、この段階では詳細を調べるには至っていないが、特に小学校の現場では複数学年で聞き取り調査を実施しているケースが多く、社会科では小4の身近な地域の学習、小6の歴史の戦争学習で実施している。その他では、国語や総合学習での平和学習、特活のふれ合い活動などが目立つなど、多様な形で実践されていることがわかった。

## 聞き取り調査を用いた実践の具体例

このように小学校では祖父母などへの聞き取りを授業で行っていることが多く、その教育的効果もよく認識されている。そこで2013年12月に、上記アンケートに回答してくれた13校のうち、聞き取り調査を行っている(または行っていた)と回答してくれた9校にインタビューを

依頼し、8校からその承諾を得た。インタビューは電話で行い、中には丁寧にFAXで資料を提供してもらったところもある。ただし聞き取りした内容は、必ずしも社会科、特に戦争体験に限定されるものではない。話し手も祖父母などの高齢者に限定されるわけではない。また紙幅の関係上すべてを紹介するわけにもいかないので、そのうち代表的な実践を紹介する。

### ①学校行事として語り部を学校に呼ぶパターン

〔墨田区立業平小学校〕「平和を考える集会」を、全学年対象に、毎年3月10日前後に開催する。その際は墨田区の老人連合会の紹介で戦争体験を語れる人を紹介してもらっている。2013年の場合は、80歳の卒業生（女性）に語り部をつとめてもらい、疎開前の業平小学校での生活と疎開の様子、東京大空襲前後の様子などについて話をしてもらった。

〔江東区立第三砂町小学校〕永寿会という老人会の会長（92歳）に相談して3名の語り部を紹介してもらい、戦後の暮らしについての話をVTRに収録して、6年生社会科の授業で視聴させる。

〔市川市立真間小学校〕同窓会があり、各学年からの質問事項を会長に伝え、文書の形で回答してもらう。

〔市川市立妙典小学校〕県内の原爆被爆者の会から、6年生の各クラスに1人ずつ派遣されたボランティアに、それぞれ被爆体験を語ってもらう。

### ②生徒がそれぞれの祖父母などに聞き取りをして学習を深めるパターン

〔市川市立真間小学校〕1年生・4年生の総合学習で、学区を流れる真間川がかつて氾濫を繰り返していたことについて、祖父母などから聞き取りをして学ぶ。国語科では、3年生の「ちいちゃんのかげおくり」<sup>(4)</sup>、4年生の「一つの花」<sup>(5)</sup>、5年生の「川とノリオ」<sup>(6)</sup>の学習に際して、学習内容をより深めるために、戦時下の暮らしについて祖父母に聞いてくる。社会科では3年生で昔の道具調べ、6年生の歴史的分野で

祖父母に聞き取りをしている。

〔市川市立富貴島小学校〕聞き取り調査を社会科見学とも併せ、調べ学習の一環として実施している。3年生はゴミや水の学習に際して、清掃局や水道局へのインタビューを行ったり、昔の道具の使い方についての聞き取りをさせている。4年生の社会科は県についての学習で、関係機関に電話でインタビューを行っている。5年生は自動車工場や製鉄所などへの聞き取り調査を、国語科では「川とノリオ」の学習で戦争学習のために聞き取り調査を、総合学習では米作りを1年かけて行い、庄内平野の米作りを学ぶ。最後は収穫して家庭科と連携して炊飯し、残った稲わらでリースを作る（図工科）。6年生は社会科で戦争体験についてのゲストティーチャーを、語り部の会に依頼し、生徒に話してもらう。

〔江東区立第三砂町小学校〕3年生の総合学習「おじいちゃん・おばあちゃんと仲良くなるう」で高齢者の疑似体験を行い、高齢者との交流を図る。4年生の社会科では、「自分たちの区について調べよう」というテーマで、資料館や図書館で聞き取りも行いながら調べ学習を行う。障がい者との交流も行い、福祉協議会の協力で、ユニバーサルデザインの学習を行う。5年生の社会科では、車いすを1週間借用し、段差などの障害を作って疑似体験をさせる。6年生の社会科では、「砂村新聞」を作成し、江戸時代の砂村について調べる。また10月～11月ごろの学習では、児童の祖父母に戦争のことを聞いておくように指示して学習に取り組ませている。また東京大空襲の時であれば、聞き取った内容について、児童に語らせている。また3年生からの高齢者・障がい者との交流の成果を生かし、最終学年の第3学期は、すみよいまちづくりの単元に反映させる。さらにハンセン病やAIDSなどについても学習し、法の下での平等に反する扱いを受けている人々に対する意識を変えていこうと試みている。

## 聞き取り調査を行うことのメリット

祖父母などの身近な高齢者であろうが、行政機関の職員であろうが、あるいは障がい者であろうが、話し手の別を問わず、当事者本人から直接語られる証言には、文字資料などからは到底得られない切実さが伴う。ましてやそれが、祖父母や先輩など身近な人であったり、地域の河川などの身近な題材についてであればなおさらである。「ちいちゃんのかげおくり」などの国語教材についての理解を深めるために、現在の小学生にはなかなか理解しにくい時代背景を、祖父母からの聞き取りで学ばせるというのも、そうした意味で極めて有効な手段である。

そこに高齢者・障がい者などの疑似体験や実習（米作り、調理、リース作りなど）、言語活動以外のアクティビティが加われば、児童の社会認識はより深まる。さらに客観的・科学的な学習活動がともなえば、児童の社会認識はゆるぎない、より確固なものになっていく。要はいかにして児童・生徒に切実感を持たせた学習教材・学習環境を作るかという点にある。その第一歩が、当事者の生の声を直接聞く、聞き取り調査なのである。

## 中学校で聞き取り調査を阻む状況

真間・富貴島・妙典・第三砂町・業平の5小学校の取り組みに共通していえることは、老人クラブや同窓会、語り部の会などの地域団体を巻き込んで、聞き取り調査を実施していることである。この点では、中学校でも職場体験の準備段階で地域の事業所に協力を求めるなど、十分に経験済みであろうから、これが中学校で聞き取り調査を行うことができない理由にはならない。

さらに、ゲストティーチャーを呼んだ富貴島・第三砂町・業平の3小学校からも寄せられたのが、話し手と聞き手の年齢差であり、「どう話したらよいか分からない。」という率直な感想であった。ただそれは、実際に行ってみればたや

すく乗り越えられるものではあるが。またこのような意見は、聞き手である児童からも寄せられることであろうが、この点については、教師の側で聞き取りマニュアル（聞き取りの心得）を作成しておけばよい<sup>(7)</sup>。同様のことは、話し手に対してもいえよう。語り部の団体は、これまでも多くの実践を重ねているのだから、そのノウハウを指導してもらえば良い。

ところで、数少ない中学校での聞き取り調査の実践としては、女子学院中学校の実践がある。それは全校的かつ継続的な取り組みで、30年以上も前から祖父母の戦争体験を作文にする指導を行っている。これらは、女子学院中学校の国語科の作文指導の一環として、中学校3年生を対象に戦争体験の聞き取り調査をしてまとめるという作業で実施されてきた。女子学院では、400字詰め原稿用紙10枚を目標に作文としてまとめさせている。なおその場合には、話し手の体験を「○○は…」で始まる三人称で、創作風に記述させている点が特徴である。さらに、この実践をへて、高校1年生の時に広島旅行をするという一連の平和教育プログラムが組まれている<sup>(8)</sup>。

また本校中学校でも、中学2年の冬期休業中の課題として、祖父母などからの聞き取り調査を行わせている。中学2年生には2004年度から実施しており、当初は筆者だけが担当していたが、2010年度からは複数教員で担当するようになった。ここ数年の取り組みで、経験年数が浅い教員でも十分な成果を挙げることができることを実証できた。

すると、一般に中学校で聞き取り調査が困難な状況を作っている原因は一体何であろうか。その最大の要因は、受験という極めて現実的な問題であろう。受験に必要な「学力」を付けようと授業時間を確保するため、聞き取り調査のような「よくやり方の分からない」実践はしたくないというのが本音なのであろう。

## 終わりに

これまでみてきたように、聞き取り調査がもたらす現代史学習への効果は明らかである。中学2年の夏休みに課題として行えば、受験準備の上でも、時間的にまったく無理はない。しかもある程度マニュアル化した方法で、多くの生徒が素晴らしい聞き取りレポートを作成してくれる。当然教員にも、新たな知見を与え、学びの機会をもたらしてくれる。ならば今後は、聞き取り調査をきっかけに、生徒がどのような「学力」を身につけていったかを明らかにし、そのメリットを訴えていくことが肝要であろう。

### 〔註〕

(1) 拙稿「歴史学習における戦争体験・戦後体験の聞き取り調査・レポート作成の授業実践と効果」『日本私学教育研究所紀要』46、2011年11月所収。」

また拙稿「戦争体験・戦後体験の聞き取り調査をどう指導したか」『歴史地理教育』784、2012年1月も併せてご覧いただければ幸いである。

(2) 全校的かつ継続的な取り組みとして最も著名なのは、女子学院中学校「祖父母の戦争体験」編集委員会編『15歳が受け継ぐ平和のバトン祖父母に聞いた235の戦争体験』高文研、2004年、早乙女勝元編著

『15歳が聞いた東京大空襲女子学院中学生が受け継ぐ戦争体験』高文研、2005年である。また高校のクラブの実践では、日出学園高等学校（千葉県市川市）の教員であった宇野勝子氏による実践がある（宇野勝子『教育・戦争・女性』ドメス出版、2005年）。また大学のゼミ活動では、松野良一『戦争を生きた先輩たち—平和を生きる大学生が取材し、学んだこと—』Ⅰ・Ⅱ、中央大学出版部、2010年がある。

(3) 拙稿「戦争・戦後体験の聞き取り調査をどう指導したか」『子どもが主役になる社会科』（千葉県歴史教育者協議会会誌）43、2012年。

(4) あまんきみこ作、上野紀子絵『ちいちゃんのかげおくり』あかね書房、1982年。

(5) 今西祐行作、伊勢英子絵『一つの花』ポプラ社ポケット文庫、2005年。

(6) いぬいとみこ作、長谷川集平絵『川とノリオ』理論社名作の愛蔵版、1982年。

(7) 前掲拙稿「歴史学習における戦争体験・戦後体験の聞き取り調査・レポート作成の授業実践と効果」。

(8) 註(2)前掲書。

〔付記〕本稿作成に際し、インタビューに快く応じてくれた各小学校の先生方に厚く謝意を申し上げます。